

2026年1月11日 主日礼拝メッセージ

聖書:エペソ人への手紙1章7~14節

説教:御国を受け継ぐ

はじめに

いろいろな方に伺うと、パウロの手紙が好きという方がおられます。しかし私は、一度読んでもすぐに理解できない難しさを感じて苦手意識があります。翻訳が悪いのではなく、もともとの文章が難しい。それで、パウロの手紙をすこしでも簡単に読めるコツがないかと考えました。ひとつ挙げるとすれば、パウロの文章はカメラに似ていると思うとよい。カメラを被写体から離れたところに据えると全体が見えます。それと同じように基本的原則から書き始めます。その次にカメラを被写体に近づけます。そうすると細かなところが見えてくるので、それを説明していく。この手紙もそういう順番で書かれているということを頭に入れておくとよい。まず基本原則は何かからはじめています。前回触れたように、祝福の中心にキリストがおられる。そういう内容でした。そして今日の箇所に入ると、こんどはカメラをキリストという被写体に寄せていく。なんども「キリストにあって」ということばが出てくるのはそういうことです。キリストに焦点をあてながら、キリストと私たちとの間にどんな結びつきがあると書いてあるのか。ともに確認してまいります。

1 キリストの血

1) 贖い

前回の復習になりますが、キリストにあって、私たちは大きな靈的な祝福をいただいていると言いました。それはよいとして、その祝福はどのようにして私たちに与えられるのか、方法と言うことに関心が向きます。例えばこれは昔のことですが、引っ越し屋さんというようなものがなかった時代、新郎と新婦が結婚して新しい家に引っ越しすというとき、会社の友人や親戚が手伝ったものでした。

「結婚おめでとう」とことばだけでなく、引っ越しの手伝いという行動で祝福の気持ちを表す。今はそんなこともしなくなりましたが、昔はそういうことがあった。

ではキリストはどうか。7節。「このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」

祝福の中心におられるキリストは、具体的にはどのような祝福を与えてくださるのか。ここにある

血というのは、キリストが十字架で流された血のことです。血が流されたことによって、私たちに三つことがもたらされたと言っています。一つ目は贖い。前にも触れたので繰り返しになりますが、奴隸状態の人が自由の身になるために支払うお金のことを聖書では贖い金と呼んでいます。私たちは罪の縄目に捉えられた奴隸状態にありました。けれども、この方が流してくださいました血によって自由の身となつた。そうやって罪から解放されました。それが贖いです。

でも、どうして血なのでしょうか。痛い思いをして血を流すのではなく、もっと別の方法でもよかつたのに。そんなふうに勝手なことを考えます。でも創世記9章5節にこうあるのです。「わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。」神の目には、罪という奴隸状態にあるということは死んでいることとまったく同じなのです。死んだ者にいのちを与えて生きた者にするために、血の価を要求する。しかし私たちは払うことはできません。神ご自身が血を流すほかに、私たちが贖われる手段はなかったのです。

2) 背きの罪の赦し

キリストの血によって私たちにもたらされたことの二つ目は、「背きの罪の赦し」です。罪にはいろいろな種類がありますが、ここではその中でも「背き」と限定している。かつて私は、「自分は無神論者」と言っておりました。無神論というのは、この世には神はいないと主張する立場での、形式的には偶像は拝まない。では聖書の神に背いていないのか。もちろんそんなことはない。無神論者も有罪です。なぜなら、神がいるかどうかを判断する中心に自分を置いている。よく考えたら自分を神にしている。こうしてすべての人が神の背いてきた。そんなそむきの罪は、キリストの血によって赦されました。

3) 一つに集められる

ここまででは、みなさんは何度も聞いたことがある。真新しいことはなかった。しかし10節はどうか。これがキリストの血によってもたらされることの三つ目になる。「時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のもの

が、キリストにあって、一つに集められることです。」あらゆるものがキリストのもとに集められる、あるいはキリストをかしらとして一つにされる。なにしろ将来起こることですから、どんなことなのか具体的に思い描くことが難しいと感じるかもしれません。しかしそう考えてください。このことが起こるのは確かに将来ではあることです。では、今なにもないということでしょうか。実はすでに始まっています。どこで始まっているのか。みなさんの最も身近なところです。教会で起きています。

みなさんは以前、キリストとは何のかかわりも持っていました。それなのにここに集まっています。なぜか。キリストを信じているからです。あるいは信じたいと願っているから。それでキリストをかしらとする教会にみなさんが集められています。よく考えたら、10節のみことばはすでに実現しつつある。もちろんまだ完全はない。いまは途上です。やがて再びキリストが来られる日に完成します。ある日突然、いきなり完成するのではない。もう始まっています。

2 御国を受け継ぐ

1) 聖書の約束

一切のものがキリストにあって一つに集められると、その後はどうなるのでしょうか。それが11節前半。「またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。」集められた者たちが御国を受け継ぎます。このことも前回も触れました。それは天国で間借りして住まわせてもらうという意味ではない。私たちは天の御国を受け継ぐ。つまり私たちが天国の所有者という立場になると書いてある。

2) 私に資格があるのか

私は宝くじを買ったことはありませんが、もし宝くじが当たったらだれでも興奮して踊り出ででしょう。11節のことばはなおさらです。本当にこれがわかつたら、うれしくてだれもが踊り出すはずです。ところがだれも踊らない。いや世の中広いですから、絶対いないとは言いませんが、でもそういう方は希でしょう。なぜか。実感がないからです。それのある方はこう言うかもしれない。「私は本当に御国を相続できるのだろうか。私にそんな資格があるのだろうか。」

こんなことを言うと、「聖書のことばを疑わず信じなさい」と叱る方がいます。でも、私は信仰が弱いと言って責めるべきではないと思います。むし

ろ反対ではないのか。その方が、神の前に誠実でありたいと願うからこそ、自分に御国を受け継ぐ資格があるのかと問いかけるのではないか。素晴らしい約束をいただいていることを素直に信じたいけれど、なかなか難しいのが現実です。そのような私たちに対し、神はどうされるのでしょうか。

3 聖霊による証印

1) 主イエスを告白する

13節、14節前半にこうあります。「このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」

聖書を読んでも御国を受け継ぐという確信が持てないし、実感もない。そんなあやふやな私たちに御国を受け継ぐ保証として聖霊を与えてくださいました。一体いつ聖霊をいたしました。救いの福音を聞いて信じたとき、聖霊をいたしました。とは言っても、御国のこともそうですが、聖霊もこれもまた本当に自分がいたしているのか実感がない。

よく聖霊は風にたとえられますが本当によく似ている。部屋の中にいれば外で風が吹いているかどうかわかりません。しかし、窓から外を見て枝が揺れている木の葉が揺れているのを見て風があると言います。風は見えないから、風は吹いていないと言う人はいません。聖霊もそれと同じです。聖霊をいたしている実感がなくても、イエス・キリストこそ私の罪のために血を流して贖ってくださった救い主ですと告白するなら、それはまさしく聖霊の働きにほかならない。みなさんのうちに聖霊がおられる証拠です。

2) すでに、一つところに集められている

それでもピンときませんか。だったら、みんなが教会に集まつてこられたのはなぜですか。せっかくの日曜日ですからもっと別の所へ行くこともできたはずです。一切のものがキリストにあって一つに集められている。このことはすでに始まっていると言いました。みんなの努力で始まったのか。いいえ、すべては神の力です。神の恵みです。今日ここに集まることができている。そのことはだれも否定できません。であれば、たとえ実感はなくても、みなさんの中に聖霊がおられる。これはだれも否定できませんから、御国を受け継ぐ資格をいたしていることになります。

神が私たちに祝福を与えてくださる。それを読んだときは、どこか遠い話しに思ったかもしれない。でもよく見たら、確かに神は祝福を与えてくださっている。このようにしてくださった主の御名をあがめたいと思います。